

千葉港のパブリックアクセスの課題と今後の展望

(株)建設環境研究所

正会員 岡本幸久 正会員 齊野玲子

日本大学理工学部社会交通工学科 正会員 吉川勝秀 正会員 崎山崇

1. はじめに

東京湾の海岸は明治初期から近年にかけて 25,000ha が埋め立てられ、京浜～京葉工業地帯として大きな経済発展を遂げる礎となってきた。しかしその代償として、藻場や干潟などの自然の海辺の喪失とともに海辺へのアクセスポイント（市民が公道を歩いて海辺に出られる場所）が減少し、親水性も損なわれてきた。そこで、東京湾のアクセスポイントの実態を把握し、今後の整備の方向性について検討した。

2. 千葉港におけるパブリックアクセスの現状

千葉港の海辺へのアクセスポイントを図1に、海岸の管理図を図2に、土地利用を図3に示す。

千葉港の海辺へのアクセスポイントは全部で35箇所あり、緑地や公園は14箇所、人工海浜は3箇所整備されている。その傾向は、いなげの浜を境に北側と南側で大きく異なっている。それぞれの現状を、アクセスポイント、海辺の形態等の視点で整理すると表1のとおりである。

いなげの浜から北側ではアクセスポイントが26箇所と多く、海辺の多くが公共用地で、海辺沿いの移動が一部で可能である。後背地の多くは住宅地であり、幕張海浜公園など市民が海辺を楽しむことのできる施設もある。ただし水際はほとんどが直立護岸のため、海辺の親水性は乏しい。

いなげの浜より南側ではアクセスポイントは少なく、アクセスポイント付近の海辺は直立護岸と直立岸壁で親水性に乏しい。後背地の多くは企業用地であり、市民の利用できる施設は少なく、海辺沿いの移動はほとんど不可能である。



図1 千葉港のアクセス図



図2 千葉港の管理図



図3 千葉港の土地利用図

表1 千葉港のパブリックアクセスの現状

	いなげの浜から北側	いなげの浜より南側
アクセスポイント	26箇所 ・うち公園・緑地は10箇所 ・公園内にある人工海浜は3箇所	9箇所 ・うち公園・緑地は1箇所
水際	ほとんどが直立護岸・直立岸壁 一部は緩傾斜護岸と人工海浜	直立護岸・直立岸壁
海辺の管轄・所有	・多くを公共が管轄	・ほとんどを企業が所有
後背地	・公共用地が多い 一部に公園・緑地が8箇所、海浜公園が2箇所あり商業施設もある	・企業が占有 企業の工場・倉庫がほとんどで市民は立ち入れない
海辺と後背地の連続性	・人工海浜は連続性がある	・海辺の整備が進んでおらず連続性はない

キーワード：海辺、パブリックアクセス、海の一里塚

連絡先：豊島区東池袋 2-23-2 TEL:03-3988-3637 FAX:03-3988-6922

3. パブリックアクセスの課題

2.で見たように、市民の利用できる海辺のアクセスポイントとその背後地の公園・緑地やアミューズメント施設等の市民が利用できる施設は、千葉港北側に偏っている。また、親水性の高い海辺(人工海浜や緩傾斜護岸)も、ほとんどは北側にある。このように、千葉港全体を見るとアクセスポイントの配置の偏り、連続性の低さが課題と言える。アクセスポイントの課題については次の3つの要素に分けることができる。

課題要素1：私有地

企業の私有地になっているため、一般市民が海辺に近づくことができない。

課題要素2：直立護岸

海辺に近づけるものの親水性に乏しい。また、生態系の多様性が低く、水質悪化の要因を誘発しているものと考えられる。場所によっては護岸の老朽化による安全性での問題もある。

課題要素3：後背地の未整備

海辺に近づけるが、後背地の整備(遊歩道や緑地化など)がされておらず、後背地から水際へのアプローチや景観に連続性が乏しく、結果として親水性も乏しくなっている。

4. 海辺の整備の方向性

千葉港におけるパブリックアクセスの課題は利用可能な海辺の連続性の確保であり、今後、千葉港全体の親水性の向上を図っていくことが望まれる。現在の海辺は、アクセスすること自体が困難であり、しかも直立護岸・直立岸壁で親水性に乏しいものとなっている。このような用地等の制限の下で親水性を高める一手法として、水際から海側に出ることが考えられる。このことにより、海を見ることと水際線を見ることが可能となる。その一例として図4のように「海の一里塚」としての整備が考えられる。市民は突堤を歩き、その先にある一里塚に出ることで海と海岸線の両方の景色を楽しむことができる。さらに、生態系を復元するような方法をとれば、海の一里塚は自然体験の場に加え生き物観察の場となる可能性も十分に考えられる。海の一里塚はそれ自体が親水性を高める機能を持っていることに加え、海辺自体の整備はほとんど必要としないため、企業用地の多い千葉港南側にも適用可能である。逆に整備可能な海辺が多い場所には緩傾斜護岸や人工海浜を施す等により親水性を高めることができる。緩傾斜護岸や人工海浜は市民が水際に近づくことができ、親水性が高くなると共に生き物観察の場となり得る。

各アクセスポイントのもつ課題要素に対しては、表2に示したような整備の方向性により親水性を高めることができると考えられる。

表2 各課題に対する整備の方向性

課題のタイプ	整備の方向性	整備による改善内容	適用の条件など	事例
課題要素1 私有地	私有地の一般市民への開放	海岸に近づける。	企業が開放したり、さらに公園など後背地の緑地化など企業の協力が重要。	海芝公園(図5)
課題要素2 直立護岸	緩傾斜護岸など親水性の高い護岸	水際に近づける。 自然度は低いが親水性はある。	必要な面積が少ないため、狭い場所での適用が可能と考えられる。	緩傾斜護岸
課題要素3 後背地の未整備	海辺沿いの遊歩道、緑地や公園、海浜公園などの近自然的な施設、アミューズメント施設の整備(海辺との連続性も重要)	より多くの市民が海辺でレクリエーションなど多様な楽しみ方ができる。	整備の可能な広さによって整備できる内容が変わる。	ボストンのハーバーウォーク(図6) 幕張海浜公園

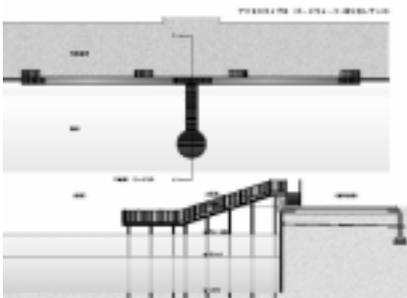


図4：海の一里塚



図5：海芝公園

(株)東芝が同社の敷地の一部を市民に自主的に開放、公園を整備

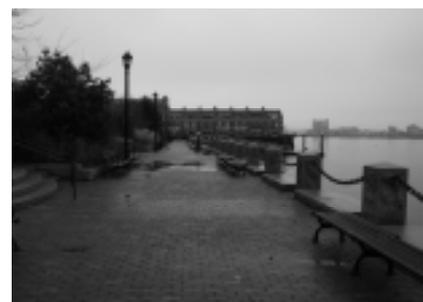


図6：ハーバーウォーク

ボストンの都市再生計画の一部として16kmに渡って整備した遊歩道